

静岡県指定文化財「富士参詣曼荼羅」の特質と機能

久野 華歩 学習院大学

「富士参詣曼荼羅」には三本の絹本作例があり、そのうち富士山本宮浅間大社所蔵のものには、「元信」印を持つ著名な一本（以下伝元信本）と静岡県指定文化財の一本（以下本図）がある。本図は、本地仏や登拝者を描かず、信仰に関与しない多様な人物風俗を描き出すなど、他諸本とは異なる特徴を有している。そこで本発表では、画面を詳細に観察し、本図特有の図様の意味やその源泉に関する考えを述べ、機能や制作期について論じたい。

例えば本図の三保松原では、千鳥や鷗など描かれた多数の鳥が謡曲「羽衣」との関係を示すと考えられる一方で、点描で表わされた白砂は参詣曼荼羅諸作例の多くに用いられている聖地表現に通じる。また清見関では、他の図様とはスケールが違う大ぶりの垣が、「正広日記」や「宗長日記」に見られる歌語に関連しながら、清見関という境界性を強調して絵の内と外を結びかつ隔てる機能を担っていることも見逃せない。すなわち、これらの名所は、中世文芸の文脈と信仰のそれとを併せ持つ場として描かれているのである。

そして中央の浅間大社境内に描かれる殊更大きな湧玉池は、四方を溶岩と思しき岩で囲むという、虚構性に満ちた描写で観者の視線を惹き付ける。登拝者を描かない本図では、この池での水垢離こそが登拝と等価な信仰の証として表現されている。池の求心力は、本図における浅間大社の重要性を端的に表わすものであるのだ。なお、湧玉池と富士川の位置関係は地理的合理性に欠けているが、それは画面上下の聖俗を転換させる機能を持つ。

人物図像については、先行研究で否定されてきた女性参詣者の存在が確認できた。加えて東海道周辺部には、遊楽の人々や生業者など多種多様な風俗の人物が見出され、これらの図像と近世初期風俗画との関わりは、これまで以上に追及されねばならない。特に、「東海道往来図屏風」（奈良県立美術館蔵）のような街道図を視野に入れる必要があるだろう。

ところで、伝元信本は本地仏や一部の参詣者など、後世の加筆が指摘されており、それらを除いた当初の姿は参詣曼荼羅としての性格が希薄であったと考えられる。また、同様に絹本の「富士参詣曼荼羅」作例である個人蔵本（竹内本）は、富士山の上部に本地仏、両側に日月と迦陵頻伽を描くもので、登拝者の姿も見られる。これらと比較するならば、本図は主眼を浅間大社の強調に置く、いわば「浅間社参詣曼荼羅」とでも呼ぶべき性格を有していることは明らかである。

最後に、本図の制作時期については、女性参詣者が確認できたこともあり、大勢の参詣者が見込まれる永禄3年（1560）の御縁年を制作契機の可能性にあげ、多様な風俗を盛り込む近世初期風俗画との影響関係からも16世紀中頃から後半を考えたい。

(ひさの・かほ)